

Title	古川古松軒の著述に就いて
Author(s)	黒正, 巖
Citation	経済論叢 (1922), 14(6): 1065-1072
Issue Date	1922-06-01
URL	https://doi.org/10.14989/127907
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷四十第

行發日一月六年一十正大

論叢

不勞利得税を論ず 法學博士 小川郷太郎

基督教文明の發展概論 法學博士 財部 靜治

社會哲學に於ける主義的の二元論的思想 法學士 恒 藤 恭

經濟道と經濟術 法學士 作田 莊一

小作制と小作法 法學博士 河田 嗣郎

時論

我邦の地租を論ず 法學博士 神戶 正雄

說苑

ジョン・ロックの私有權論 經濟學士 岩城 忠一

功利主義と生産政策 經濟學士 堀 經夫

雜錄

古川古松軒の著述に就て 經濟學士 黑 正 巖

『共產宣言』の英譯本について 法學博士 河 上 肇

附錄 本誌第十四卷總目錄

雜 錄

古川古松軒の著述に就いて

黒正 巖

第一 緒 言

古來我國には地理の書が甚だ多いけれども、その内容は何れも一種の地誌であつて神社佛閣名勝古蹟を雜駁に羅列したものにすぎぬ。然るに徳川の末期に及んで内外の事情は地理の研究上にも著しい影響を及ぼし、政治上經濟上の見地から地理を考究するの傾向を生じて來た。即ち本多利明、林子平、近藤重藏、間宮林藏の如きはそれである。乍併彼等が地理の研究に力を用ひたのは地理そのものを單なる獨立の學問としてではなく、更に他の目的を到達するの方便としてであつた。古松軒が地理の研究に没頭するに至つた動機は右の人々と同じであつたかも知れぬが、少くともその著述に徴しその行動

より推察するに、地理研究の態度は著しき特色を有して居る。翁は社會現象の地理的分布の状態を靜的に考察するを以て満足せず、更にその因果關係を探究する事に努力した。殊に經濟狀態の研究に重きを置き、一國一藩を一の經濟地域と考へその經濟狀態を比較し、盛衰貧富の差異を生ずる原因を廣く自然的社會的政治的に求めようとした。經濟地域の區分を樹て之を比較論究する方法は最近經濟地理學上の根本問題として重要視されつゝある。然かも當時既に古松軒は之を意識しなかつたにしろ、かゝる研究方法を地理學に用ひたことは奇といふべく又卓見といはねばならぬ。翁の地理、政治、經濟等に關する思想に就きては別に論述すること、し本稿に於ては簡單に翁の略傳并に著述の梗概を記すに止めようと思ふ。

第二 略 傳

古川古松軒は享保十一年八月（西紀一七二六年）備中國吉備郡新本村（當時岡田藩）に生る通稱を平次兵衛といひ、字は子曜、諱は辰友は

1) 岡山縣人物傳、翁の手記、御用諸事留、近藤鐵之助著古川古松軒、塚本吉彦氏の研究（吉備史談會講演錄 p. 64以下。）地學雜誌（明治四十三年十二月號）山陽遺稿古川翁傳

正辰と稱す。古松軒はその號にして又黃薇山人（吉備山人）、竹亭とも號す。世々藥種業を營み傍ら醫術を施す。中年に至る迄郷閭に隔躋し獨學を以て地理歴史の研究に耽り、本業を疎外して居た。旅行を好み常に諸國を週遊しその生涯に於て殆ど日本全國に足跡を止めざるはなく、城廓都邑、山川港灣、神社佛宇は固より交通物産風俗等に至る迄親しく探究した。翁は繪畫に巧にしてその著書には必ず實寫圖を挿入して讀者をして容易に理解せしめようと努めたのみならず文章も極めて平易にして何人も通讀することが出来る。又翁は「コムバス」法に由つて地圖を畫いたので、當時地圖法の幼稚なりしに拘はらず彼の製作せる地圖は比較的に正確である。

天明三年春（西紀一七八三年）西遊の途に上り山陽道を経て九州に入り、東部より薩隅を経て長崎に出で福岡門司をすぎて歸る。更に天明八年（西紀一七八八年）奥羽巡見使藤澤要人、川口久助、三枝十兵衛に隨つて奥羽并に蝦夷地を巡遊す。寛政五年春（西紀一七九三年）京阪に遊

んだが幕府の召出に由り一應歸國した。倉敷代官より「公儀御用之儀に付御徵狀到來候まゝ乍太儀關東へ罷越候へ」との言渡があつた。彼は「老衰且つ虛名の段御免下さるべき」旨を歎願したが許されず八月出發して九月江戸へ到着す松平樂翁公に謁見し西遊雜記、西國筋海濱圖并に信濃紀行を上る。翌六年二月武藏國地理調査役を命ぜられ二月二十一日江戸を發足し二十二日より御府外五郡を調査し八月下旬に之を終つた。註それから十一月迄に地理圖二枚、四神地名錄五卷を作製して幕府へ呈出した。この當時は翁の最も得意の時代であつたらしい。十二月辭職を歎願し許されて國に歸る。閑地につくや觀書筆硯を友とし、岡田町の隣、齒村に居を卜し四方を繞らすに竹林を以てし、門前の一小流に板を架し平素は之を撤して俗人の出入を禁じて居たといふ、竹亭の號は之より出づ。

寛政七年岡田藩主は古松軒に苗字帶刀を許し士格に上ばし二人扶持を給した。古松軒は交友極めて廣く凡ゆる階級の人士と交はつて居た。

尾藤三洲、頼山陽、頼春水、菅茶山、香川景樹僧澄月、谷文晁、瀧澤馬琴、近藤重藏、長久保赤水等と最も交が深かつた。頼山陽の日本外史に於ける、馬琴の八犬傳に於ける城廓地理の正確なるは古松軒の影響が與つて力あるといふ。又支那人にも二三の友人があつたので支那に關する知識は彼等によるものらしい。文化四年十一月十日(西紀一八〇七年)病で逝く、年八十二新本村宅源寺に葬る。明治四十三年十一月特旨を以て正五位を贈らる。翁の後裔橋本修吾氏は久しく米國に在て醫師たりしが今は新本村に住す。

註、武藏五郡調査役任命の辭令は次の如くである。

伊藤播磨守領分箇中岡田町古川平次兵衛へ

其の方國々地理の儀相心得罷有趣相聞候に付武藏國の内、別紙繪圖面赤紙印置候内の村々へ罷越御府外の分、山の高下何山より何山へ續候と申儀、向背險易、其外往來道筋海川之儀、彌村の廣狭土地の善悪舊蹟産物等委相改書而或は繪圖面に認可指出旨戸田采女正殿被仰渡候ひ御專請役柏原由右衛門、御小人目付室田留三郎遣候間得其意事御可申渡候以上、道中路用一ヶ月金二兩、御扶持二人扶持五割増

第三 著 述

雜 錄 古川古松軒の著述に就いて

古松軒の著書は余の寡聞を以てするも相當の部數に上る。併し何れも寫本のまゝにて世に行はれ板本となつて居るものはない。最近に至り吉備群書集成第一輯に「古川反古」及び「吉備の下道」なる二小篇が初めて印刷となつて見はれたにすぎぬ。かような有様であるから余の涉獵したものは決してその全部ではなく、重要なものにして尙ほ余の手にすることの出来なかつたものも多々あること、思ふ。例へば西國海濱紀行、秘事要錄、竹亭關ヶ原志五十三卷、四國巡禮記の如きは翁の著書として重大の價値を有するものであらうが、充分の努力を以て探索したけれども遂に閲讀することの出来なかつたのは余の大に遺憾とする所である。今余の知れる範圍内に於て少しく翁の著述について解題を試みよう。

一 西遊雜記

之は前述九州遊覽中の作である。日記體であるがその論述する所は從來の地誌紀行と大に趣を異にし、城廓防備の利不利を地理上并に經濟上より論じ、更に各藩の經濟

- 2) 翁の諸事御用留に由る、
- 3) 近藤錄之助氏著、古川古松軒
- 4) 翁の後裔橋本修吾氏所藏、翁の書翰中にこの事あり、

状態を比較しその異同を生ずる原因を究め翁の鋭敏なる觀察力は隨所に閃いて居る。書中各藩の人民生活の状態、農具等一々圖を以て示し、更に人情風俗、山川原野の状態等微に入り細を穿ち好個の經濟地理書である。單なる記述の書でなく常に因果の法則を發見せんとの努力が見はれて居る。橘南谿の西遊記等と全く選を異にするものである。この書は東遊雜記と共に翁の著述中最も多く世に行はれて居るものであつて全部七卷より成る。東西兩大學圖書館、内閣文庫、岡山縣立圖書館等之を藏す。この外個人の時代にかゝるものも相當にある。

二 東遊雜記 天明八年五月六日より十月十八日迄の奥羽巡檢使隨行の日記體紀行文であつて十卷より成る。その記述の態度は西遊雜記と同じく政治經濟を主として居るが、何分にも西遊の際と異り一定の巡見路筋のみを通過し諸種の研究考證をなすの餘裕がなかつたのみならず、その見る所は凡べて虚飾を以て蔽はれて居る部分のみであり、到底下情を詳かに探知する

機會が少かつたため、西遊雜記の如く筆も延びず又稍うはすべりの觀がないでもない。

之については翁自身もその口吻を書中に漏らし居る。若し翁をして單獨にこの旅行をなさしめて居たならば大に見るべきものがあつたであらう。併し翁は常に閑暇さへあれば土地の人々に接してその地方の一般經濟の状態等を質問し精細に記述して居る。従て駕の中から見聞した所を記したものにすぎぬけれども、比較的正確にして各地の事情を概觀することが出来る。近之れ翁の觀察力の鋭いことに由るのである。近藤重藏が寛政十一年より十二年に亘り蝦夷地の巡視に趣いた際、アトイヤより古松軒に宛てた手簡の内に「不佞去春松前御用被仰付四月十五日江戸發程五月十六日三馬屋渡海同二十三日松前出立箱館へ罷越申候兼ねて老人御編述の東遊雜記相携へ沿途之勝概松前の風物比較いたし候處毫差無之老人一過眼の地烟霞之妙察全く山水の奇骨を被得候御事と感心不啻候……」とあるによつて見るもその正確さが知れる。乍併蝦

5) 岡山圖書館の分には寛政己未來三月備後管晉師謹選の序文がある。

6) 近藤正齋全集第一卷21頁以下參照

夷地に關する議論并に南部地方の廣袤の測定等には多少の誤謬を含んで居る。

古松軒はこの旅行に際し種々の地理書を携帶して行き、至る所で之を比較考證した。最も多く誤謬を指摘され論難攻撃せられたのは林子平の三國通覽志である。長久保赤水、新井白石も相當にやられて居る。林子平が樂翁公のために罰せらるゝに至つたのは古松軒の激越なる攻撃にその源を發して居ることさへいはれてゐる。この點については史學者間に大問題を生じたのであるが茲には詳述しない。⁷⁾ 本著は東西大學圖書館、内閣文庫、岡山圖書館等所々に在る。卷數には多少の異同があるけれども内容は何等變りはない。

三 歸郷信濃（一名信濃紀行） 天明八年奥羽順遊を了へて國へ歸るの途、信濃路を旅行した際の紀行である。中仙道各地の産業狀態その他一般の地理を記述して居る。江戸の森川宿より筆を起し江州三上山に筆を措く。全部一卷、岡山圖書館の藏する所。

雜錄 古川古松軒の著述に就いて

四 都の塵 寛政五年の春、京阪の知人を訪ねた時の紀行である。播州路の南部を経て大阪に遊び京都に上り、當時知名の文人墨客公卿達と舊交を暖め、兼ねて附近の山川名勝を探つた。書中至る所に政治經濟を論じ特に經濟と地理との關係を説いた所は最も注目すべき點である。全部一卷にして吉備群書集成刊行會、岡山圖書館之を藏す。

五 古川反古 「天明八年戊申の春吉備山人古川古松軒拜」とありて手紙の形式をなした一冊本である。前半は自分の生地を中心として備中岡田村以下十六ヶ村の地誌を記し、後半に於て經濟論を試み此の地方が昔時に比し次第に衰退する所以を論じて居る。他見を憚つたと見えて文末に「他に見せ給ひて僕に罪を責させ給ふこと有まじく候、世の中になびかば何かうき草の流ればよしやすみ濁るとも」とある。蓋し當時は赤裸々に時勢を非議し世に發表すれば身に危険あるを以て志士の間には常に秘密を守りて思想の交換をなすの習慣があつたことは周知の

第十四卷 (第六號一四七) 一〇六九

7) 歴史地理第11卷2號、19卷6號、23卷2號、24卷1號、33卷12號、三宅博士、藤井氏、井野邊氏、高橋氏及び上野文學士等の論文がある。

事實である。最近刊行の吉備群書集成第一輯に
收載せらる。

六 八丈島筆記 比較的廣く行はれて居る
もので一冊本である。卷末の自序に曰く「右に
記する事は八丈しま伊豆七島を御支配ありて嶋
々へ渡り給ひし三河口の何かし君(太忠)此度備
前國兒島郡の海面付洲新開御見分として同國天
城村へ御下向にて有故召されしにより七十餘日
御側にまかりつれつれの折を得八丈島を初とし
伊豆七島の風俗事政を尋ねまいらせて記し置も
のなり于時寛政九年丁巳の仲夏三河口君の旅館
天城村小倉氏の宅にあひて七十翁古松軒誌」と
ある。項を分つこと三十、先づ八丈島の開拓史
を述べ八丈島渡海が黒潮早潮のために困難なる
ことを詳説圖解し、更に人口、風俗、宗教、言
語産業、物産等を詳かに記し、又その貨幣經濟
の行はれてゐないことに就いて種々の考察を試
みて居る。地圖その他珍奇なる植物等の圖をの
せてある。

七 四神地名錄

内閣文庫の藏する所にし

て全五冊より成る。武藏御府外地理調査の成果
である。寛政六年六月の著作にかゝり豊島、多
摩、荏原、葛飾、足立の五郡の諸事情を記す。
殊にその經濟事情并に經濟論が紙數の大半を占
め翁一流の考察を以て自然と經濟又は人間活動
との相關々係を明にし更に各郡の比較研究に力
を注いで居る。又江戸近郊の都市化の傾向を述
べ農家の經濟が著しく企業化する状態を論じて
居る點は特に注目し値ひする。尤もその記する
所は五郡の各村々に亘つてはならないが、よく概
觀比較し得るように要點を攫んである。この著
は翁の最秀いでた力作であつて、翁を從來の地
理家と異らしむる最も特異の著述である。四神
の地とは四神相應の地の意にしてその序文に曰
「天長く地久にして萬代かけて動きなき四神の
地、名にしおふ武藏野の曇なき玉川の渡、清らな
る墨田川の流れを探り四神地名錄と題し……」
とある。

八 武藏地名錄

その内容は四神地名錄と
同一である。余の閱讀した内閣文庫の藏本は表

紙の「四神」の二字を削り「武藏」と書き直した形跡が明かに残つてゐた。後世の人が改題したものであらう。

九 白河樂翁公謁見録 寛政元年初めて樂

翁公に謁見するに至つた次第を書いたものである。近藤歙之助氏の『古川古松軒』に収載されて居る。主として翁が地理研究に従事した動機并に研究の態度を明かにしたものである。

一〇 御用諸事留書 寛政五年三月より六

年十二月に至る迄の武藏地理調査御用中の日記にして調査の様様を大體に察することが出来る岡山圖書館の所蔵本は寫本である。

一一 地勢論并に軍勢人數論 翁の絶筆に

してその逝去前四個月即ち文化四年八月の作である。岡山圖書館の蔵本は合冊一卷となつて居る。極めて簡單なものであるが、戦争又は軍法と地理との關係を論じ、地理の觀念を陳外せる軍法の價値なきことを高調した。聞く所に由れば竹亭關ヶ原志は地理上より關ヶ原戰を研究したもので、この地勢論軍勢論はその序文又は補

遺として書かれたものであらうといふ。後の研究考證に俟つ。

一二 吉備の下道 著作年代不詳、一冊本

にして三十六項に分ち備中下道郡(今の吉備郡)の名所舊跡神社城砦の考證并に吉備眞備その他偉人の事蹟を述べたものである。論致精細であるが舊來の地誌と殆ど異なる所なく、東遊雜記西遊雜記等と著しく趣を異にす。吉備群書集成第一輯に收む。

一三 秘用姓氏錄 寛政七年中秋の作、備

中南部十六邑の土民の姓氏を考證したものある吉備群書刊行會その寫本を藏す。

一四 名所めぐり、名所の家苞 岡山圖書

館の所蔵、二書合本となる。後者の表紙に天明六丙午春圖とある、一種の圖繪にして全然研究的のものでなく、圖を主とし所々にその説明を加へて居るにすぎぬ。その卷末の文によれば旅行も出來ず又一般の地理書を讀むことの出來ぬ婦女子の爲めに書いたものである事が分る。

一五 地圖

以上は古松軒の著書の概要を述べたのであるが、この他に多數の地圖がある。勿論伊能忠敬の如き新式の地圖法によつたものではなく従來の繪圖式のものであるが、翁の工夫に成つたと稱せらるゝ「コムパス」の法を用ひたもので大體に於て正確である。その最も大作にして且つ優秀なるものは武藏國御府外之地圖、東亞地圖、備中全圖、大阪市街の圖、三國通覽大略圖批評蝦夷全圖等である。

右の内最も特色あるもの武藏御府外地圖である。之は各地の物産を一々地圖上に記したもので一種の産業地圖である。余の知れる範圍に於ては我國最古の産業地圖ではないかと思ふ。製作の年代は寛政六年にして橋本氏の所藏。又大阪市街の圖は製作の年代は不明であるが版行されて居る。市街の條理を記したもので最近の市街地圖と同じ作法である。東亞地圖は林子平の三國通覽の圖と大差はないが北海道、山丹、唐太地方に於て餘程改良せられてゐる。三國通覽大略圖批評に於ては完膚なき迄に林子平を攻撃し

て居る、併し攻撃して居る古松軒の議論の内にも今日の目から見れば大に誤つた點もある。何れも橋本氏の所藏である。備中全圖は天明二年の作、内閣文庫に收む、圖の傍らに備中の國情を概説し地理の必要を説く。蝦夷全國は天明八年の作にして東遊雜記にある。又北海道史にも附圖として轉載せらる。

以上の著述を一讀すれば古松軒が我國地理學史上に特異の地位を有することは明かとなる。翁は地理を政治經濟の方便とせず、又地理の政治的經濟的説明を以て満足せず、進で政治經濟と地理との關係即ち政治經濟の純粹なる地理的研究を試みたのである。誠に現代の人文地理學者經濟地理學者が將に進まんとせる領域の扉を開いて之に這入つて行たのである。我國今日の地理學は我國有の地理學が其儘進化發展したものであるのではないが、往時已に相當進歩せる地理學の有つた事を表明するものも亦斯學研究上徒爾ではあるまい。終りに此研究に就き大藏省文庫高橋俊氏岡山圖書館長武藤正治氏并に橋本修吾氏の種々便宜を與へられた事を深く感謝す。